

2年前の3月11日から、ずっとずっと行きたいと思っていた被災地。

「その」瞬間から、心と体の準備だけは整え（仕事は全く段取れないまま）、県社協の被災地派遣に応募して落選し、どうしたら行けるんだ！？と思いながら時は過ぎ、もう約2年が経ってしまいました。

2月に東京まで仕事で行けるチャンスをいただき上京出来た期間は4日間。うち仕事は2日間。最初は東京で時間を過ごそうかと思っていましたが、せっかくのチャンス。

そこで何をするわけでもなくて良いから、現状を見たい。その場の空気の中で、ありのままを感じ本当の姿を知りたいと思い、夜行バスに飛び乗り岩手県大槌町に向かいました。

翌朝、バスは岩手県釜石市に到着します。

釜石市ももちろん津波の被害を受けた場所ですが、駅前には思いのほか建物の復旧も進んでいて、正直「あれ？大丈夫なんや」との気持ちと、駅前に設置してある「追悼の鐘」を打ち鳴らして祈りを捧げる日常の姿に、なんだかギャップみたいなものを感じました。

釜石駅から大槌町までの線路は未だ復旧しておらず、移動はバス。  
バスに乗り、進むにつれて景色は刻一刻と変化していきます。

なぎ倒されたであろう木々の跡

1階2階部分が破壊されたままの建物

ひん曲がったガードレール

超大量の災害廃棄物の山

均等に並んだ仮設住宅

仮設の建屋で営業するコンビニエンスストア

2階まで津波に襲われた大槌町役場。正面入り口。

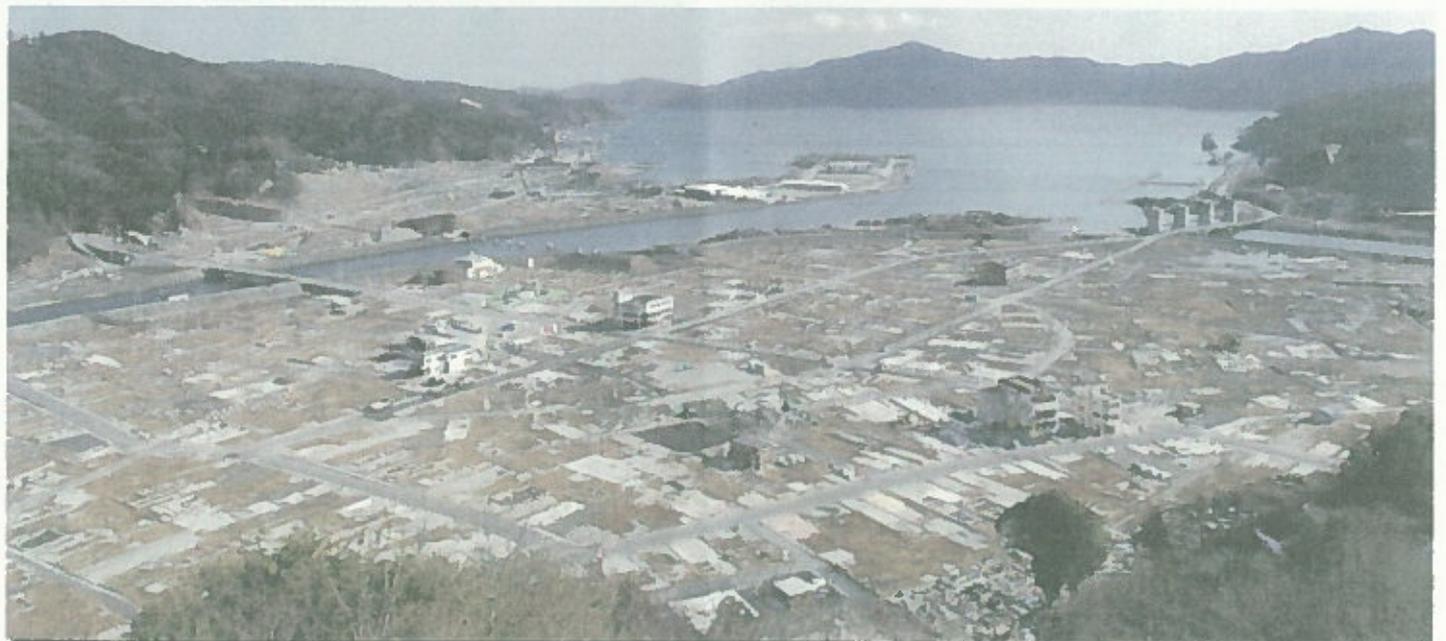


大槌町は東北の「三陸地方」に含まれ、岩手県内でも海の側である「沿岸地方」に属します。震災時、町長を始めとする町職員幹部ら約60人は災害対策本部を立ち上げるべく町庁舎2階の総務課に参集しましたが、止まない余震にいったん駐車場へ移動し、さらに津波接近の報を受けて屋上に避難しようとしたものの、約20人が屋上に上がったところで津波が到達。町長と数十人の職員は間に合わず、庁舎の1、2階を襲った津波に呑み込まれてそのまま消息が途絶え、町長以外にも課長クラスの職員が全員行方不明となったため、行政機能が麻痺した、というところ。

「震災から2年経てば、少しは復旧も進んでいるだろう。」

と思っていた私は、甘かった。

津波に襲われ、壊滅状態となったままのその場所に、ただただ言葉が出なかった。



旧大槌町役場周辺側。土地はガレキを除いたままの状態。整地はされていない。

しかし、今後の町の復興計画では、この場所に新たに防潮堤を築き、住宅もできる予定。